

吉野中央ふれあいセンターだより



阿波市

令和6年2月

発行 吉野中央ふれあいセンター
住所 阿波市吉野町西条字宮ノ前27-1
TEL088-696-2486/FAX088-696-2581

「笑顔が広がる ふれあいの場」 1/2も やさしさと愛情 感謝の心

“皆さんお元気ですか”

歴の上では立春となりますが、あいも変わらず厳しい寒さが続いております。

この度の能登半島地震により被災された皆様、ならびにそのご家族の皆様に、心よりお見舞い申し上げます。皆様の安全と被災地の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

さて、皆さんは、年始に「今年は毎日散歩して健康な生活をする」等、一年間の目標を決めていると思いますが、中央ふれあいセンターでは令和6年のスローガンを「**笑顔が広がる ふれあいの場**」と定めて、センターを利用される皆さんが、気持ちよく仲良く利用していただけるよう願っております。

なお、昨年のスローガンは「**あなたがいるこの場所が好き**」でした。

笑顔が広がる
ふれあいの場
2024



新しい一年も、中央ふれあいセンターが「笑顔が広がるふれあいの場」になりますように！

豊臣の金銀の行方



豊臣秀吉は莫大な金銀を蓄えていたが、豊臣滅亡時、その金銀はどうなったのか。私の司会番組「英雄たちの選択」で藤堂高虎のことを調べるうち様々な史料に行き当たった。藤堂は伊勢・伊賀（三重県）の大名。徳川家康の天下取りの謀略を支えた。豊臣を滅ぼした時、家康は藤堂の手を取り頭上に頂き「関ヶ原から当表（大坂夏の陣）まで藤堂の心入れのおかげだ。これで太平だ。言葉もない」（『忠勤録』）と手ずから酌をした。

そうであろう。藤堂は豊臣大坂城攻めに先鋒として参戦。伊賀から五〇人もの忍の者を連れて敵の動きを知らせた（『高山公実録』十八）。同じく先鋒の井伊直孝は「忍ノ者三十人、十組にして大坂に付」けたが、忍者の人数では藤堂の方が多かった（『増補難波戦記』）。大坂の陣での家康の謀報網の秘密を明かせば、これら藤堂と井伊の忍者は野外偵察が中心。大坂城内の軍議の決定事項は別ルートから入手していた。

京都所司代の板倉勝重が朝比奈兵右衛門という家来を浪人に偽装して潜入させ、すでに徳川方に内通している秀頼の船奉行・樋口淡路守の元に付け、大坂城内の極秘情報を送らせていた（『落穂集』十二）。そのため家康側は事前に大坂方の作戦計画を記した秀頼の軍勢手配書も入手しており、自分の本陣に真田信繁が攻めてくることも察知していた（『高山公実録』二十七）。この情報を得た時、家康は「いくさにはや勝った」と叫んだ（『武徳編年集成』）。

この時点で、家康にとっての問題は落城時に大坂城内にいる孫娘・千姫の身柄と豊臣家の莫大な金銀を、どう確保するかにうつった。そこで家康は先鋒の藤堂と井伊に、こう命じた。

「大坂落城の焼け跡の（豊臣家の）千枚分銅は上様（徳川将軍家）に召し上げる。そのほか焼け跡の金銀が（溶けて）湯になっている。この金銀を藤堂と井伊にやる。有り次第取ってこい」（『西島留書』）

「宝蔵の焼け跡に金銀が多くある。井伊と藤堂にやるから勝手次第に掘って取れ」（『先鋒録』）。

金の**大判千枚**で作られたのが**千枚分銅金**。

ところが、豊臣埋蔵金を狙っていたのは家康だけではなかった。当時、小倉城主の**細川忠興**の軍も狙っていたらしい。藤堂家は五月八日は徹夜で「埋まり物を堀りに出ている」が、未の刻（午後二時）に、**細川の手の者と奪い合い**になり、**戦闘が発生**。多数の死者が出た（同）。埋蔵金をめぐる人間の欲望は恐ろしいものである。

井伊と藤堂は仲良く掘っていたらしい。藤堂は外様大名で徳川家の信頼を得るため万事に遠慮がちであった。藤堂が「あなたも私も、こたび先手（名譽の先鋒）のご奉公をした。それは天下の人々が見聞きしている。こんな灰ほじりは要らざることと存する」と言い、井伊も「もっとも」と同意していた（同）。

こうした**豊臣埋蔵金の搜索で家康は秀吉が遺した分銅金を手中にした**。そして家康は**藤堂には金と銀の分銅を一個ずつ分与した**。藤堂がこの分銅金銀二個を江戸に運んだ時の逸話がある。「**金は八人。銀は四人にして、これを荷ふ**」（『言行録』）。金の**二千枚分銅は重さが約三三〇キログラム**。千枚分銅金はその半分。品川宿まで運んだ時、藤堂は宿場の力自慢の男に「この分銅、担げたらやる」と冗談を言った。すると本当に担いでしまった。藤堂は内心慌てたが「二つ担げ。一つは誰でも担げる」と、とっさに返した、という話が伝わっている。オチは、いささかケチくさい。

（歴史書より）

